

木次（文夫）賞

木次文夫さんは、現在の佐久市入沢の出身です。父母は小学校教員として佐久の小学校で教鞭を取り、松本市蒲田小学校の校長を最後に退職、文夫さんは野球王国松本で、名門松商学園に昭和二十八年に入学し、野球人生が始まりました。

松商時代に三回甲子園出場、三年生の時には主将となりました。甲子園では中京商業（この時の夏の優勝校）と戦い、センターオーバーの大三塁打を放って、ファンやスカウト達をうならせました。当時身長 185 センチの大型一塁手として活躍しました。

早稲田大学では、四年間で通算七本のホームランを神宮球場のスタンドに叩き込み、これは、当時立教大学の長嶋選手の八本の記録に次ぐものです。大型ホームラン打者木次の名前はますます高くなりました。

昭和三十四年のスカウト合戦の焦点となり、巨人、大洋、阪急から指名を受けましたが、巨人に入団しました。後に、当時前年巨人に入団した長嶋選手より、高い契約金だったと云われました。

木次選手には、【運命を変えた一枚の紙切れ】と云われた話があります。本当はストレートで入学していれば、長嶋選手と同学年のはずが早大の受験票を忘れて試験会場に行くというミスがあり、入学出来なかったということです。その為に、一年間早大の聴講生として通い、一年後に正式に入学しました。この聴講生生活が木次のマイナスになりました。当時の早稲田は六大学野球リーグ戦を春秋制覇し、木次は主将四番一塁手で活躍、その翌年昭和三十五年に栄光の巨人軍へ入団、将来を期待されましたが、そこには野球の虫、王貞治、長嶋茂雄がいました。プロの道は甘くなく木次を寄せ付けません。一年前に早稲田実業から巨人に入団していた王選手と一年間競争をした結果、後に王選手は世界のホームラン王になり、木次は敗れて、三年間で野球界を去りました。その後、木次選手は脳溢血で倒れ、四十歳の若さで生涯を閉じました。

現在は静かに佐久市入沢の木次家の墓地に眠っています。

妻子なく、短い野球人生をいかに生きたか、木次文夫さんの死を悼み、野球好きの親戚有志で昭和五十一年臼田町少年野球育成会に地元選手として短いながらプロ野球会に在籍した功績を広め、野球を学ぶ青少年の皆様の夢への応援として木次賞のトロフィーを寄贈しました。

毎日の練習で叱咤激励されている選手の皆様も、木次選手のようにプロ野球選手を目指して頑張ってください。